

## フランス映画におけるフランス植民地帝国

—— 「シベールの日曜日」について

L'Empire colonial français dans le Cinéma français

—— Sur <Cybèle ou les dimanches de Ville d'Avray>

梶川 忠

Tadashi KAJIKAWA

Dans la première guerre indochinoise, Pierre a été pilote de chasseur. Il croit avoir tué une petite fille vietnamienne et il est devenu amnésique. En banlieue de Paris, il a rencontré une petite fille mystérieuse qui l'amène à la voie droite. Le monde n'en reconnaît pas les rapports. Il s'est perdu la vie par la police et elle s'est perdu le vrai nom.

白黒の画面に何かが写っている。一機の飛行機が飛んでいる。パイロットが大写しになる。雲の晴れ間から密林が見える。雲にさえぎられる。田園が見える。水を湛えた田んぼが日の光にきらきらと輝いている。雲にさえぎられる。部落が見える。人々が逃げまどってうろうろしている。パイロットは冷静に爆撃する。ただ自分の仕事をするだけなのだ。ふと目をやると大木の根元にアオザイを着た少女がすくんでいる。パイロットが気づき、正面から少女を見る。大写しになる少女の顔。大きな目を見開いて、大きく口を開けて聞こえない叫び声をあげている。パイロットの記憶はそこで途切れる。

セルジュ・ブルギニョン監督の映画「シベールの日曜日 (Cybèle ou les dimanches de ville d'Avray)」(1963年)はこのように始まる。インドシナが登場するのはこの冒頭だけである。

パイロットは記憶喪失になり、パリの近郊に住んでいる。なぜ記憶を失ったのか、少女がどうなった(病院へ運ばれたときに「彼女は死んだか。僕が殺したのか」とうわ言をいっていた、という同居人である元従軍看護婦で、今はパリの病院で働いているマドレーヌが友人に語っているが)のかはわかって

いない。映画は、ただひとりの男のもどかしさを描いていくだけだ。

男は少女を見たから、記憶を失ったのではない。戦争で人を殺すには大儀がなければならない。男は第1次インドシナ戦争にその大儀を見つけられなかったのだ。

インドシナはかつてフランスの植民地であった。そこでまずフランス植民地帝国の歴史を概観しておきたい。

ヨーロッパの植民地獲得はまずスペインとポルトガルによって始められた。フランス王国は二国に対抗して、1534年にジャック・カルチエを西に向かって旅立たせる。カルチエはセント・フローレンス川に着き、オシユラガ(後のモントリオール)まで遡った。これがフランスがアメリカ大陸に印した第一歩である。

中断期があったものの、その後フランスはアメリカ大陸(例えばカナダやルイジアナ、また南アメリカではガイアナ)、カリブの島々(アンチル諸島・マルチニーク・グアドループ)、アフリカではアルジェリアの海岸部、セネガル、マダガスカル、イン

下のボンディシエリなどを支配下におく。ただし19世紀に入るまでは、ほとんど貿易上の拠点としての意味しかなかったのである。

帝国主義の時代になり、フランスの植民地獲得の意志はますます強くなる。1830年以降マグレブ諸国(チュニジア・アルジェリア・モロッコ)・西アフリカ・中央アフリカ・太平洋の島々などを占領し、ベトナムに侵攻したのはナポレオン三世の時代(1852—70)であった。

ベトナムでは宣教師たちが布教活動をおこなっていたが、阮王朝は1830年にキリスト教を弾圧するようになり、48年には禁教令を發布、宣教師や信者が処刑されるようになった。そこでナポレオン三世は南部のコーチシナへの侵略を決意したのである。侵攻は1858年に開始された。

フランスはカンボジアを1863年に保護領にし、1867年にコーチシナを完全に占領し支配下におくとともに、ベトナム中部のアンナン、北部のトンキンに目を向ける。最大のライバルであるイギリスに先んじて中国に入り込むためである。

1885年には清仏戦争の結果清朝の宋主権が失われ、ベトナム全土を支配下に入れた。1887年に仏領インドシナ連邦が発足、1893年にシャムを武力で威嚇して保護権を得たラオスをも1899年に連邦に加えた。ここに仏領インドシナ連邦が確立したのである。

インドシナで栽培されたものは、米・コーヒー・茶などであるが、中心になったのはゴムであり、プランテーションによるゴムの生産量は、1915年の298トンが、1929年には1万トン以上に増加したのである。

ベトナムにおける反植民地運動は、20世紀に入るとともに始まっている。最初は近代的知識人やブルジョワによるものであり、破壊活動はあるものの、フランスを否定するものではなかった。1930年には初めて大きな暴動が起き、インドシナ共産党が成立した。指導者はグエン・アイ・オク、後のホーチ・ミンである。民族主義者は1941年にホーチ・ミンの主導で「ベトナム独立同盟(ベトミン)」を結成し、全面蜂起をしようとする。

1940年から1945年まで日本軍に占領されたものの、第2次世界大戦後には、またフランスの主権は復活する。しかし日本軍の攻撃によってフランス軍は行動不能になっており、1945年9月2

日にベトミンが独立を宣言した。

1946年3月にフランスとベトミンとの間に暫定協定が結ばれた。ベトナムをフランス連合に帰属する共和国として認めるというものであった。しかし解釈を巡って対立が起こる。完全独立を求めるベトナムに対し、フランスはフランス連合内での自治を認めるに過ぎなかったのだ。交渉は決裂し、ベトミンとの戦闘が始まる。第1次インドシナ戦争(1946—54)である。フランスは最後の皇帝だったバオダイを擁立し、サイゴンにベトナム臨時政府を作って、それと交渉を始めた。

戦後の世界では反植民地運動が盛んになっていた。その先頭に立つのはアメリカとソ連であった。ところが1949年に中華人民共和国が成立すると、アメリカは植民地帝国のフランスを援助するようになる。共産主義の拡大を防ぐためであった。

戦闘は一進一退をつづけた。戦後のフランスには長期の戦争に耐えられる余力はない。フランス国内では遠いベトナムへの関心は薄かった。徐々に厭戦気分が生じる。1954年にベトナム北部のディエン・ビエン・フーで、フランス軍は敗北を喫した。アメリカの支援で戦争をつづけるのは可能であった。しかしフランスは戦争継続を望まず、インドシナには南北ベトナム・ラオス・カンボジアの四か国が誕生したのである。

記憶を失ったパイロット・ピエール(ハーディ・クリューガー)は、マドレーヌに面倒をみられながら、パリ郊外にあるヴィル・ダヴリーの町に住んでいる。マドレーヌは看護婦のせいか献身的に面倒をみているが、ピエールは心を開いていない。ただひとり信頼しているカルロスという芸術家の手伝い(巨大な鳥籠をつくっている→記憶を失い外界との交わりができなくなったピエールを象徴している)をしたり、駅にたたずんだり(一年前には外出も出来なかった)して、毎日を過ごしている。彼は自分が「台無しの人生(une vie gachée)」を送っていると感じている。

カルロスがピエールにいう言葉は重要である。駅にはあまり行かないように言った後、「木をみろ。木は別だ。たくさん愛すればみんな分かるようになる(Regarde des arbres. Un arbre, c'est différent. Si tu aimes tant, tu peux tout comprendre.)」と、木に親しむように勧める。ピエールも「木は、

そう、助けてくれるよ(Les arbres, oui, ça aide.)」と応じ、人との接触よりも、自然との共感の方が大事であることを認めるからだ。(それに加えて、知り合いになるシベールも木と関係をもっている)

ある夜、彼は父親につれられた女の子シベール(パトリシア・コッジ)に出会う。父親は聖アンドリュウ修道院の寄宿舎に女の子を入れようとしているのだ。捨てられる(捨てられたら孤児院に行かねばならない)のを直観している女の子は父親にあらがっている。ついていったピエールは、女の子を修道女に預けた父親が、忘れ物を門の蝶番にひっかけて立ち去るのを見てしまう。父親が二度と来ないことを直観したのである。

次の日曜日に父親はやってこず、嘆いている女の子の前には、代わりにピエールが立つことになる。後に彼が女の子に語る言葉によれば「もっと昔にきみに会った気がする(J'ai l'impression de t'avoir déjà vu.)」からであり、「君を知りたかった、助けてほしくて(Je veux te connaître, puisque tu m'aides.)」からである。髪の色こそ違え、大きな目と大きな口がベトナムの少女を思い出させたからだろう。

こうして自分が誰かわからない男(30歳)と、少女シベール(12歳)の短い蜜月が始まるのである。

ただしシベールCybèleという名前は森と大地の女神であるギリシア語のKubelèに由来している(男にとっては、最後にこの名前が明かされるので気づいている訳ではないが、だから女の子は木の化身になっている)、さらにsi belle(とても美しい)と音が同じである)のでキリスト教的ではない。だから修道院ではフランソワーズと呼ばれることになる。つまり修道院はシベールとして生きてきた過去を否定したのである。当然女の子はフランソワーズとは呼ばれたがらず、自分の本当の名前は胸に秘めている。ピエールが名前を聞いたときには、教会の天辺にある風見鶏を取ってくれたら教えるとまでいうのだ。

彼らはヴィル・ダヴリーの美しい森(画家のコローが描いている)を歩く。最初は大人(保護者)と子供という関係であったのだが、繊細なシベールはすぐに男が普通ではないのに気づき、対等な付き合い、いやむしろ彼女が積極的にリードする関係になる。少女が泣いたり拗ねたりと女になっていくのだ。

少女のお喋りがつづく。「18になったら結婚して(Ecoute, On se mariera si j'aurai dix-huit ans.)」「お母さんにいいたいことを(Ecoute, si tu avais des choses à dire à ta mère,)私にいて」「(森の真ん中にある池の波紋に揺れる自分たちをみて)歪んでるわね。波紋の中に入ったの(Voilà, nous sommes sinueux. On est entré dans des cercles.)」。水中から撮ったかのように、散歩する彼らははかなくみえる。

波紋に揺れる森の木々、ピエールのもっているガラス玉を通して見える万華鏡のような森の木々、それらを映し出す映像のみごとき。この映画の成功はここにある。

君と外に出るようになって、前のことを考えない。

Depuis que nous sommes sortis, j'ai oublié de penser avant.

つまり？

Comment ça?

以前は考えていた、僕はだれで、どこから来て、何してたのか。今は考えない。それが恐ろしい。(・・・) des autres jours, j'ai tout tendu ma tête, qui j'étais, d'où je viens, qu'est-ce que je faisais. J'ai oublié à penser. Ça me fait peur.

私が治してあげる。

Je te guérirai.

あれほど思い出したがっていた過去が気にならなくなる。日曜日ごとの少女との逢瀬が楽しければ楽しいほど、男はキスを求めるマドレーヌを避けるようになる。日曜日にマドレーヌに付き合わされた友人たちとの会食では、不機嫌なままだったし、遊園地で遊んでいたときには、ふとみかけたシベールに錯乱し大騒動を起こしてしまう。

池の畔でシベールが男の子たちと遊んでいるときに、女の子に抱きついた男の子をピエールは殴ってしまう。そんな行動から、日曜日に森で散歩する人々の間でふたりは有名になり、ピエールは「痴漢」とまで呼ばれるようになる。

マドレーヌがピエールの異常に気づき、カルロスに相談する。芸術家の直観で、ピエールが女の子に悪さをするはずはないと力説する。「子供と同じだ(Il est comme un enfant.)」。最後にカルロスは

「彼が君を必要としているのではなく、君が彼を必要としているのだ(C'est plus lui qui a besoin de toi, mais toi qui as besoin de lui.)」と論じ、そっと見守ることを勧めさえる。ピエールは普通の日常は送れないけれど、自分の世界に閉じこもっている。それに対し、マドレーヌにはピエールなしの生活は考えられないからだ。例えるなら、人間は猫の面倒をみてやっていると考えると、猫にとっては大きなお世話ということになるということか。

ある日曜日マドレーヌは病院に勤めに行くと言いつき、森に出かける。凍った池の氷を割ったり、木に剣を突き刺して、精霊の声を聞いているふたりをみて、カルロスの言葉を納得する。

実際にレストランに入ったふたりが注文するのは、grog(ラム酒に砂糖とレモンを加え熱湯を注ぐ、風邪のときの飲み物)やgrenadine chaude(熱いザクロのシロップ)なのである。

クリスマスの日に、ピエールはカルロスの家にあるクリスマスツリーを盗み出す。ふたりでパーティーをするときに必要だからだ。カルロスから連絡を受けたマドレーヌは、恐ろしくなって医者ベルナルに相談する。医者は躊躇なく警察に連絡する。

森の小屋で支度をしているときに、ピエールが指に怪我をする。指の血を吸ったシベール。「血を吸ったから、あなたの考えていることは全部分かる(Je connais toutes tes pensées.)」。シャンペンを飲んだシベールは、自分の死ぬときのことを喋る。「自分は名前も知られないままに死んでしまう。だけれども本当の名前を知らないから(puisque, mon vrai nom, on ne connaît pas)」。フランソワーズとしては死ねないのだ。

そして「私が死んだら、あなたも死ぬ?(Si je mourrais, tu mourrais?)」という問いに、男がうなずいたから、ツリーに吊るされた女の子のプレゼントの中には、シベールと書いた紙切れが入っているのである。

男は約束どおりに風見鶏を盗みにいく。教会の天辺で取り外しているとき、あれほど悩まされていた眩暈を忘れていないことに気づく。「眩暈がしない!(Le vertige, je n'ai plus.)」。ここ何年かの自分ではなくなった。つまり男は再生したことを実感するのだ。

けれども女の子の許に戻ったとき、男は警官に射殺される。気がついた少女の叫び声「名前なんかな

いの。もうだれでもないの(J'ai plus nom! Je suis plus personne!)」は、やっと信じられる人間を、出会ったときに失ってしまう悲しみを際立たせる。

シベールはピエールの上に立っていた。ある時は母親のように、ある時は小悪魔のように振る舞って、ピエールをリードしていた。しかし彼らにとってはそうであっても、外部からみたら男が女の子を弄んでいると理解される。だから警官が射殺したことは、社会を維持するという点では正しいことになる。

しかし排除すればすべて片がついたことになるのだろうか。

第1次インドシナ戦争で、ピエールは加害者であったけれど、結果的には被害者になってしまった。少女を無意味に殺害した心の傷から解放されないまま、このヴィルダヴリーで暮らしている。彼は眩暈に苦しめられていた。悪い道を走っているバスのバックミラーが大写しになるが、それに反映する揺れる壁のように彼の視界はつねに揺れていた。すでに述べた、波紋に揺れる森の木々や、ガラス玉を通してみえる万華鏡のような森の木々は、ピエールにとっての外界なのだ。

また日曜の午餐会の時に、ピエールはしきりに外を気にしていた。霧が立ち込め、視界の効かない森を眺めていた。これは当然ピエールの内面である。

つまり視界良好のなかで一点をみつめるという、本来人間がもつべき(もちがたいが)視点を、ピエールは拒絶されたまま生きねばならなかったのだ。そしてシベールを見かけたとき、ピエールは直観した。「君ならばくを助けられるかも(Je pensais que peut-être, toi, pour m'aider.)」シベールによって、自分は現状を抜けられるかも知れない。そんな思いでシベールに執着した。

最初シベールがピエールを受け入れたのは、孤児院に行かなでずむように利用するためであった。しかし付き合ううちに、祖母が占い師であったせいか、鋭くピエールの状態を見抜いてしまう。すでに記したように、剣を木の幹に突き刺すと、そこから精霊のささやきが聞こえるなどという託宣は、祖母直伝のものであろう。そしてそういう近代とは、科学とは無縁のもの、古代より伝わったもののほうが、むしろピエールの心にじっくりときた。他の大人ならば一笑にふすような少女の戯言も、病んだ男の心には真実として響くのである。

シベールという古代ギリシャの女神に由来する名前をもち、祖母から占い師の素質を受け継いだ少女は、大袈裟にいうならば近代（あるいはキリスト教世界か）を否定するためにやって来たのである。近代を受け入れることで本能を失った人々の世界につかわされた、文明化されない人間からの使者なのだ。もちろん他の大人はまったく感じない。ただの風変わりな少女にすぎない。ピエールは純粹だからシベールに気づいたのだ。

だから近代の常識は彼らふたりの関係を認められ

ない。シベールがピエールを癒しているとは考えない。「痴漢」という言葉が象徴するように、ピエールは少女に猥褻好意をはたらく男に過ぎないのだ。近代の理性に従ってピエールは射殺され、人間ではなくなった。シベールは自分の名前を剝奪され、キリスト教徒に相応しいフランソワーズとして生きねばならない。彼女も「もうだれでもない」存在になったのである。

近代は異端を許容できないのである。

(受理 平成11年3月20日)